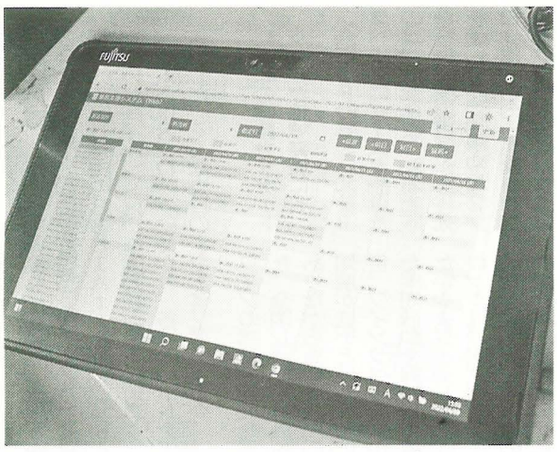
業界潮流リポート74

システム活用し社

タック印刷

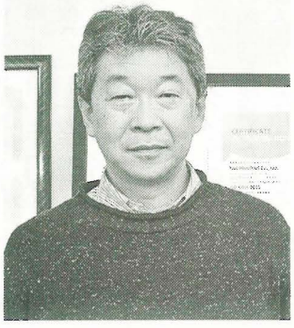
工業系分野の顧客へ向けて安全規格「UL」認証に沿ったラベルなどを提供する㈱タック印刷（東京都墨田区業平、高田朋幸社長、☎03・3623・4034）は、社内データの収集・整備による作業工程の見える化と効率改善に取り組む。併せて、ULラベルのウェブカタログを作成するなど情報発信にも注力。システムを通じて得られた各種情報を活用する経営革新を進め、社内外に向けてポジティブな影響を与えている。（大野）


日報を電子化しオペレーターのタスクをタブレットで管理

同社は主に製品の識別や説明に使用されるULラベルの提供を行っており、リピートジョブを多く手がけている。2019年に㈱創風システム製の業務支援システムを導入し、見積もりや納品書・請求書作成、印刷現場へ渡す仕様書の発行などを効率化。ジョブ履歴1万件ほどを電子管理し顧客からの発注データなどに基づくEDIを活用することで、リピートジョブの際に都度手入力していた手間と時間を削減できている。新規案件に関しても、原価情報などのマスターデータを基に見積もりを誰でも迅速に出せるようになった。

20年には製造現場の工程管理用にタブレット端末を設置。従来、紙ベースだった日報を電子化し、オペレーター1人ずつの作業実績と予定を可視化した。印刷から加工、検品といった各工程への受け渡し時、担当者間の意思疎通がスムーズになったほか、残業時間の計算も簡略化。納期前倒しなど急な作業依頼があった際、スケジュール変更の判断や工程の組み直しが容易に行えるようになった。

営業と製造の現場における効率化や見える化の効果について、高田社長は「お客さまからお問い合わせをいただいた時のレスポンスが早くなりました。受注した仕事が印刷前なのか検品中なのか、それとも発送作業待ちなのか、どこの工程にいるのかをはっきりとお客さまへお見せできることは信頼の向上にもつながります。また、社員同士でもお互いの作業が分かるとコミュニケーションが円滑に進み、風通しもよくなっている印象です」と話す。


高田朋幸社長

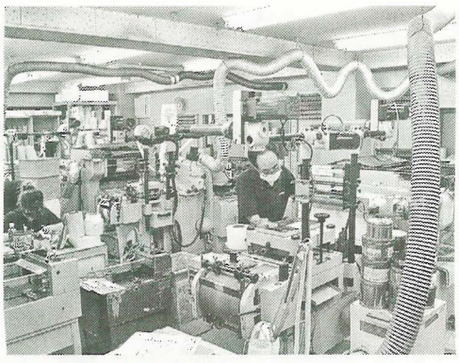
システム導入による見える化で営業・製造を支援

「社員が楽に楽しく働ける環境へ」

業務効率化にあたって、まずは営業サイドがシステムを導入して社内で効果が認められたため、製造サイドへのタブレット端末設置による電子化もオペレーターに抵抗なく受け入れられたとしている。作業実績の見える化は、ともするとノルマ管理など社員へのプレッシャーにもなり得るが「一律のノルマを課すというのは後ろ向きな方法ではないでしょうか。社員ごとに能力や見通しも異なるわけですから、各人に応じた目標を定めて活躍してもらうために、システム導入によって得られたデータを活用しています」（高田社長）とコメント。見える化は社員1人ずつに対しての解像度を上げ、誰が・なにを・いつできるのかなどの目標設定にも有用とする。

同社の需要動向について、工業分野はコロナ禍に見舞われた20年は需要減、21年に顧客の製造ラインが再始動したが半導体不足などを要因に先行き不透明な状況が続く。そのような中、対外的な情報の見える化にも取り組んでおり、HP（https://www.takprint.co.jp）でULラベルのウェブカタログ「UL／cULLABELS LINEUP」を公開している。

カタログには「被着体から選ぶ」「基材から選ぶ」「特殊性のある粘着シート」といった項目を設け、これまでUL規格に精通した担当者の頭の中だけにあった情報を可視化。門外漢でもカタログを基に、活用シーンに合わせたULラベルを発注できる。独自ノウハウをさらけ出すことにもなるが、あくまでも顧客が求める情報にリーチしやすくするための施策と定義。事実、ウェブ経由の新規案件の引き合いは増加しており、システムによる迅速な見積もりも相まって好評を博している。


システム導入で意思疎通が円滑に

ハンディ端末の新ソリューションも

今後も蓄積してきたノウハウや作業実績などのデータを生かし、社内外向けにさまざまな施策を講じていく。現在、創風システムの協力を得ながら、ハンディ端末を活用した出荷前検査の効率化にも取り組んでいる。出荷前のラベルのバーコードと出荷データリストを照合することで、送付先・品目をすばやく確認できるようになり、出荷ミス防止にも貢献する。

高田社長は「社内からも『もっとこんなことができれば』と意見が挙がり、システム導入で改善できる余地はまだまだ残されています。引き続き、社員が楽に楽しく働ける環境づくりを目指します」と展望を話す。